

# 台湾徒然



第55回

## 産まず、育てず……

先日、出生人口統計が発表され、大きな反響を呼んだ。昨年に台湾地区で産まれた子供の数が、16万6000人だったという。史上最低であるとともに、出生実数がこの10年で半分になってしまったのだ。

このまま推移すると10年先には人口はマイナス成長に転じる、そして子供の数が半分になれば多くの学校や企業が倒れるのではないかと、遅きに失した「心配」が全島を覆ったのである。昨年の統計を基に計算する1000人あたりの出生数は7・21、いわゆる合計特殊出生率(TFR)は、前年の1・03から一気に0・91になる見通しだ。一人の女性が生涯に産む子供が「一人」を切った数字の衝撃は大きい。これは、香港や韓国と並び、世界最低を競う記録である。

また、アジアで日本に次いで高齢化が進行中。この島にも少子高齢化が直撃しているわけだが、いままで台湾

の人たちに目立った危機感はなかった。政府をあげて少子化対策が叫ばれるわけでもなく、保育所をつくれというデモがあるわけでもない。その無関心ぶりにはいささか目を疑うものがある。そもそも女性が結婚しなくなったという難問が存在している。30歳以上55歳未満の女性の4割が未婚だという。男性は海外(中国大陸を含む)からのお嫁さんを貰うしかなく、一時は国際結婚が婚姻の3割にも達し、政府が制限をした今でも16%を占めるのである。

赤ん坊については、台湾にきてから驚かされたことが少なくない。大半の妊婦とお母さんが、ためらいもなく帝王切開だった。痛いのはいやという理由のほかに、好きな日に出産できるという「メリット」があった。そして母乳をやらないという人も多かった。体形が崩れる、めんどろという理由のほかに粉ミルク信仰もあったのだらう。

さらに不思議だったことは、赤ん坊と一緒に寝ないという親が少なくなかったことである。台湾には乳児を預かる公立の保育所はほとんどない。ご近所の保育ママに託すか、祖父母に預ける。とくに後者になると、夕方に引き取りに行かないケースが多かった。すなわち、1週間預けっぱなし。週一で顔を見に行くのだときいて仰天した。保育所など作らないわけである。



赤ちゃんを抱っこするママの姿は台北では希少

購買力で日本を上回るとも言われ、経済繁栄を誇りながら、大卒初任給が日本円に換算すると7、8万円程度。結婚、出産、育児からますます遠ざかる台湾女性の状況を、社会が問題視することもない背景には、彼女らが低賃金社会を支え続けているということがある。ほんとうは、結婚できない、子供は産めない、育てられないというのが実状なのかもしれない。

そして身代りに動員されているのがアジアからの「外籍新娘」。その数すでに三十数万人に達し、その7割近くが中国大陸出身者だという。台湾Yahoo!で「外籍新娘」を検索すればずらずらと女性の顔写真が登場するだらう。いまやインターネットで容易に新娘⇨花嫁がゲットできる時代なのだ。少子化にも人口減にもいいさかも動じない鷹揚さは、こうしたこだわりのない「国際的寛容性」が支えているのかもしれない。

### 柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ  
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きる』『台湾先住民・山の女たちの聖戦』『タロキ峡谷の閃光』(以上現代書館)、『台湾革命』(集英社新書)、『明治の冒険科学者たち』(新潮新書)など。元日本軍人軍属の最後の声を綴った『台湾戦後65年』<http://www.taiwansengo.jp>を更新中。